

## 28. 日本における潜水病受け入れ可能施設について

池田 真 赤木 淳 堂本英治  
鈴木信哉 伊藤敦之

(海上自衛隊潜水医学実験隊)

大量に潜水病患者が発生した場合、1施設では対応できない場合も考えられる。日本における潜水病患者受け入れ可能施設の現状を、いずれはネットワーク化することも視野にいれて調査した。

【方法】電話アンケート調査をおこなった。質問内容は、治療の可否、収容人員、耐圧深度、酸素供給法、治療プログラムなどであった。

【結果】調査をおこなった全国の主要66施設中現在患者受け入れ可能は42施設であった。24施設から老朽化等のため受け入れ不可あるいは困難との回答を得た。受け入れ可能人員は1名から20名前後までさまざまであった。治療プログラムは米海軍治療テーブルを使用している施設もあったが、独自のテーブルでおこなっている施設も存在した。

【まとめ】日本における潜水病受け入れ可能施設についてアンケート調査をおこなった。各施設それぞれ独自性をもって活動をおこなっているものの、将来的には各施設のネットワーク化、治療テーブルの標準化とその改善についての共同作業等、解決していくべき問題がまだ存在すると考えられた。

## 29. Panggang 島における潜水漁民の実態調査

M. Faried Wadjdi<sup>\*1)\*2)</sup>, W. Chichi Johra<sup>\*1)</sup>  
Onny T. Prabowo<sup>\*1)</sup>, Francis Silooy<sup>\*1)</sup>  
Susan H. M.<sup>\*3)</sup>

〔\*1)インドネシア大学医学部衛生学教室大学院高圧医学専攻〕  
〔\*2)ジャカルタ・インドネシア海軍病院高気圧医学科〕  
〔\*3)ジャカルタ ORCA ダイビング・スクール〕

Thousand Island 群島に属する145名の潜水漁民、息こらえダイバー74名(51%)、フーカ式ダイバー63名(48.3%)及びスキューバダイバー1名(0.7%)の潜水方法、潜水形態、装備及び漁具並びに潜水作業に由来する障害について、正確なデータを収集すべく潜水作業及び健康調査を実施した。この研究は94年8月25~28日及び9月8~11日に Jakarta 北方75kmのPanggang 島において行われた。

面接調査の結果、潜水方法、特に、日々の潜水作業で生じ得る健康問題について殆ど知識を持っていない。殆どのダイバー(84%)は減圧症について全く実地的な知識がなく、また、全員が潜水用呼吸ガス清浄がなぜ必要性かについて知らない。息こらえダイバーのうち、50名(68.1%)は耳気圧外傷による鼓膜穿孔を認め、フーカ式ダイバーの19名(30.2%)は潜水作業による減圧症と認められる症状を経験している。殆どの症状はType I減圧症とみられるが、少数、2名が四肢のマヒ所見からType II減圧症と判断した。このように重症減圧症例が少ない理由には、「もろあみ(MOROAMI)」潜水漁法という、魚を捕獲しながら深い作業深度からの緩やかな傾斜浮上方法が影響しているのではないかと考えられる。手指、肩、肘及び膝関節などに numbness や疼痛を来した場合は、すべての例がマッサージ、アルコール飲料及び鎮痛剤の服用で痛みを軽減し、水中再圧などは行われていない。長期間の潜水作業による健康への影響や後遺症については、来年初めに予定する調査で慎重に検査する予定である。この研究以前、彼らは高気圧医学の医師とは連絡が無かったが、現在は、われわれと良い関係が出来上がっている。